

1. 退魔を撃ち落として

「ローレイの亡霊。人の形を亡くした今も尚、
魂に絡みつく焦燥感。
退魔の向こう側に焦がれていたものは、一体何だったろう」

「おいで。昔話をしようか——」

やみ 時の奥で燃え尽きていく 淡くありふれた日常
やみ 病は加速し 現実さえいつか侵していく

日毎夜毎 繰り返される 甘く歪む過ち
抱えた傷を飲め合えば、もう投げ出せばいい

神に背いたとて 誰が二人を救うの？
だってとうに常識など 何処にも無いのだから

禁忌の果てに 救済が在るのならば
の 瞳を開けたまま愛を誓い 共に堕ちよう

選択の瞬間にも 決して揺らいだりはしない
たとえ往く先が地獄だとしても

「兄様、どこにも行かないで。私を一人にしないで——」

「どこにも行ったりなんてしない。ずっとキミの傍にいるよ」

「二人だけの僅かな時間、交わされる甘い囁き。
まるでガラス細工のようなごっこ遊び」

差異を咎め 否定されては 先矢う嫌
素は投げられ 示した目を神は嘲笑う

不実 無実な母の言葉 痛み刺んだ心
見えない悲は擦り切れて、もう落ちることはない

神を憎んだとて 誰もワタシを救けない
ただひたすらに 抱えたいだけ 誰にもないのだから

願いの果てに 救済は在りはない
の 瞳を開けたまま 愛に飢えて 何を咄くの

選択の瞬間には 行き場の無い感情など
隠し抱えてくことは出来ない

「いつか壊れたとしても
兄妹だけは抱えてる」

「壊れゆくキヤミイの魂
それすら美しいよ 永遠に」

禁忌の果てに 救済が在るのならば
の 瞳を開けたまま愛を誓い 共に堕ちよう

選択の瞬間にも 決して揺らいだりはしない
たとえ往く先が地獄だとしても

「母親に虐待を受けながらも、健康に微笑むキヤミイ。
それが母親の嫉妬を助長させていくことに気付くこともなく。
キヤミイにとっては兄の存在だけが全てだった。
アクトも心から妹を愛していた。
徐々に、けれど確実に壊れていく存在の美しさを、
無意識に感づながら……」